記念講演

伊吹有喜さん記念講演
『雲を紡ぐ』に込めた想い
－人生に無駄な寄り道なし－

記念講演は、作家の伊吹有喜さんにお話しいただきました。埼玉県立浦和第一女子高等学校の木下通子さんが聞き手となり、Zoom で Live 配信及び後日配信を行いました。

左：木下さん　右：伊吹さん

『雲を紡ぐ』に込めた想い

木下　素敵なショールをお召しですが、『雲を紡ぐ』（文藝春秋）に登場するホームスパンですか。

伊吹　はいそうです。主人公の高校生、美緒ちゃんがお守りのようにもっていたホームスパンです。この作品を書くときに、実際に工房の先生に作っていただきました。物っていうのは買ったときが一番素敵で、だんだん古びていきます。しかし、ホームスパンは逆で、使えば使うほど魅力を放ちます。親子孫と3代がずっと愛用できます。そんな心惹かれるホームスパンを作っている職人の物語を読んでみたいと思ったのがきっかけで書き始めました。

木下　おじいちゃんのセリフがすごく素敵ですよね。

伊吹　おじいちゃんは本当にいいことを言っていますが、実は完璧ではなくて、息子やおばあちゃんとの心の行き違いなど、いろんな後悔と悲しみが降り積もって、美緒ちゃんに優しくできているというふうにとらえています。なので、美緒ちゃんがもっとちっちゃい頃におじいちゃんのところに行っていたら、もっと当たりが強かったかもしれません。

木下　絶妙のタイミングだったんですね。

自分のいいところを探してみる

伊吹　『雲を紡ぐ』の中でとても好きな箇所があって、美緒ちゃんにおじいちゃんが「本当に自分のことを知っているか？何が好きだ？どんな色、どんな感触、どんな味や音、香りが好きだ。何をするとお前の心は喜ぶ？心の底からわくわくするものは何だ」って問いかけるんです。悪いところばかり見ていないで自分の良い点も探してみたらどうだと言うんです。皆さんも嫌なところ、欠点は気になって、いくらでも出てくるとは思うんですけど、意外と自分のいいところは出てきません。自分のことを自分で思う分には別に謙遜しなくていいので、いいところにスポットを当ててあげるといいと思います。

レファレンスサービスは執筆の友

木下　図書館は利用されますか。

伊吹　図書館のレファレンスサービスは最高ですね。執筆していると疑問がいっぱい湧きます。今は編集者さんも協力してくださるんですが、アマチュア時代は全部一人で調べます。図書館で「こういう事情でこれが知りたいんです」って言うと、司書さんが地の果てまで探して、素晴らしい情報を次から次へと集めてくださいます。

木下　すごく嬉しいです。図書館関係者も励まされると思います。

伊吹　まだプロになっていないアマチュアの自分の作品に、ここまで熱心に調べてくださる方がいるっていうのは、涙が出るほど嬉しかったです。インターネットの調べものもいいですが、自分のフィルターで情報を拾うことになります。他の方が調べてくれると思わぬ角度からの提案があり、自分の持っている世界がさらに 2 倍 3 倍に広がっていくので、すごくおすすめです。

少女雑誌のイベント運営を担当

木下　いつ頃から小説家になりたいと思われたのですか。

伊吹　小学校2年生の時には絶対小説家になると文集にも書いていました。しかし大人になるにつれて自分の周りに小説家もおらず、自分にとって遠い世界の話しだと諦め、手に職をつけようと思い法学部に行きました。司法試験はダメでしたが出版社に採用され、就職を決めました。

木下　編集の仕事をされていたのですか。

伊吹　それが「よっしゃ編集者になるぞ」と思ったら、少女雑誌のイベントを運営する部署に配属になりました。ファッションのことなど分からなくて半分泣き暮らしていました。しかし、少女雑誌に寄せる読者の熱ってすごいんです。モデルさんに会うためにイベント開始の6時間前から会場に並んだり、そんな読者の熱と編集部の熱というものをその時すごく感じとりました。それが実は後に『彼方の友へ』（実業之日本社）という少女雑誌の編集部の話を書くときにとても活かされました。

木下　本当に無駄なことがないんですね。

伊吹　そうですね。その仕事をしている時に、シナリオの勉強を始めました。シナリオって小説と違い起承転結をつけて次回も見てねという盛り上げ方のメソッドがちゃんとあります。後に小説を書き始めるのですが、シナリオで勉強したことが全て活かされました。今まで小説は途中までしか書けなかったのが、初めて最後まで書けるようになりました。

作家デビューは 39 歳

伊吹　それからシナリオの賞に応募するようになり、創作の魅力に取り付かれ、出版社の仕事に名残はありましたが、28歳の時に会社を辞めました。その後、フリーランスのライターの仕事をしながら創作活動を続け、30歳の時にようやく小説を書き始めました。

木下　それからどれくらいでデビューされたのですか。

伊吹　それが 10 年かかっちゃいました。最初の長編小説を書くのに3年かかりようやく完成しましたが受賞とはならず、また振り出しに戻って、2作目が2年半ぐらいかかりました。それでもだんだんと1つの作品を書く期間が短くなって、1年半ぐらいで書けるようになったとき、デビューが決まりました。

木下　伊吹さんのへこたれない気持ちはどこから生まれてくるのでしょうか。

伊吹　やっぱり好きだという一念にあると思います。好きで好きで離れられない、執念みたいなものだったのかもしれません。

心を支えられた詩

木下　最後に、皆様にメッセージをいただけますか。

伊吹　本日は図書館のイベントなので、愛読書の話をしたいと思います。応募作が落選するたびに自分の心を支えてくれた詩があります。『黒田三郎詩集（現代詩文庫）』（思潮社）の「紙風船」という詩です。「落ちてきたら 今度は もっと高く もっともっと高く 何度でも 打ち上げよう 美しい 願いごとのように」小説って、読んでくださる方に楽しい時間を過ごしてほしいという気持ちで作者たちは書いています。いわば美しい願い事です。これからも、美しい願い事はたとえ何度落ちてきても、もっと高く、もっともっと高く打ち上げていこうと思います。

（記録：埼玉県立熊谷図書館　相馬 一行）